南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語同窓会

2010年春　第10号
発行　南十字星会

連絡先　大阪府池田市五月丘 2-5-113-402
電話 Fax　072-753-1693
Email　rocky3@wombat.zaq.ne.jp

インドネシア語と私のインドネシア研究

市　村　真　一　('44卒)

大阪外語時代を回想すると、感謝と共に深い感慨をもつ。私は一生を殆ど学者として過ごしたが、インドネシアとの縁は今につながっている。その縁（えにし）の事を記す。

大東亜戦争勃発の直後、昭和17年4月、私は満17歳の誕生日の数日後に大阪外語馬来語部に入学した。19年9月に繰上げ卒業、特別甲種幹部候補生として豊橋陸軍予備士官学校入校、翌年6月卒、東京陸軍幼年学校の生徒監補佐に任ぜられた。8月終戦。11月復員。翌21年京都帝大経済学部入学、24年卒。25年米国留学、28年ＭＩＴより博士号を得て帰国。以後学者として今に至った。

1、外語時代のインドネシア語の勉強

外語時代の想い出は非常に多いが、忘れがたい事が2つある。1つはインドネシア語の勉強、2つは友人との勉強会である。

英語に比しインドネシア語は文法も発音も簡単であった。だから語彙が勝負だと判断して、毎日京都駅近くの我が家から大阪上六までの1時間半の通学車中、受験勉強式にカードを作って単語を憶えた。バレー部で夕方まで練習、読書会もやりながらだったが、1年経つと、内藤先生の教材の新聞は苦労なく読め、イスマイル先生との会話もできるようになった。

当時、友人と流行歌をインドネシア語に訳して歌った。一部は今でも憶えている。例えば「別れのブルース」、

Bukalah Pintu, Tampak Pelabuhan
'Meriken Bandar, Cahaya Kelihatan　.....

もう1つ、「愛染かつら」、

Bunga dan Buaya Dilampaui
Majulah Terus, Itulah Jiwa Lelaki ...

これでも、韻もふみ歌える様に苦心した。

語学の勉強で気がついたのは、辞書が良くない事であった。宮武のイ和辞書は良かったが、語彙不足だった。それに装丁が悪くてすぐぼろぼろになった。丁度その頃、馬英辞典が復刻されて何とか満足できたが、インドネシア・ラヤを読むと無い単語があった。

更に深刻なのは、和イ辞典の無いことであった。宮武の小辞書はあったが、我々の知識の方がすぐ上回った。良いイ和辞典無しでは現地で通訳ができない。そこで考えた。宮武のイ和辞典をひっくり返せば、形式的に和イ辞典ができる。それを段々改善すれば、そこそこのイ和辞典ができる筈。宮武の辞書200頁、クラス25名が分担すれば、1人8頁。大したことない。第1稿はすぐできる。やろう、と皆に話したら、クラス全員よしやると言う。カードに書いて、それを整理して第1稿は数ヶ月後に出来上がった。

ところが、その頃から戦局が悪化、25名のクラス中10名が学徒出陣、残り15名も大阪造兵廠に勤労動員で、学校に行くのは週1日だけとなった。カードの山のまま、辞書プロジェクトは頓挫した。卒業の時下級生に、もし私が生きて還ったら完成するから、空襲の時は必ず持ち出してくれ、と懇請した。

だが、復員して訪ねた母校は、爆撃でがらんどう。授業は高槻の兵舎で行われていた。出会った後輩に聞いたら、爆撃時にカードは焼失と。残念無念。和イ辞

書作成は、戦死した級友や我等の夢と消えた。今でも良い和イ辞典は無い。だから今も、インドネシア語の通訳養成は至難であろう。

２、外語時代の勉強会の読書尚友

次に勉強会。外語は語学教育中心だったが、一般教養の教育も優れていた。国語の吉田教授、法学の白井教授、経済学の中谷京大教授、東洋史の市村大高教授等々、錚々たる一流の先生方であった。その刺激もあって、学生の研究会や読書会が盛んだった。1 年上の蒙古語に足立稔という生徒がいた。彼が呼びかけた読書会に参加した。教本は岩波文庫の吉田松陰「講孟餘話」。参加者は、蒙古語から足立の他に、福田定一（後の司馬遼太郎）等数名、馬来語からは私と親友の石田登寿男であった。この読書会で、足立は他校のサークルも紹介してくれた。そこでの友人や教えられた東西の哲学や歴史の読書が今も私の血肉となっている。しかし勉強会は長続きしなかった。足立も福田も石田も学徒出陣したからである。足立と石田は遂に帰らず、石田はフィリッピンで斬込隊長として戦死した。後に京大へ入った時，また米国へ留学した時、この勉強会での読書尚友が、極めて水準の高いことを知った。有り難いことであった。

３.京大東南アジア研究所の所長に

経済学では、私は数理経済学から始め、次に日本経済の計量分析に進んだ。43 歳まで、脇目もふらずそれに専念した。

インドネシア語と無縁だったわけではない。留学中 George Ross という米人学生に請われて、インドネシア語を教えた。彼は後に国務省の役人になり、ジャカルタにも勤務した。しかし私のインドネシア語の語彙は、英語の上達と共に、急減していった。

昭和 42 年も終り頃、大阪大学の社会経済研究所で日本経済の計量モデルを完成した直後、京都大学に東南アジア研究所を創設するので、その所長になってくれないか、と要請された。折しも各大学とも紛争の最中で、京大は東大と共に特に激しかった。悩んだが、引受ける決心をした。その理由は、日本は高成長して戦後の困窮期を脱し、私の経済学研究の動機である貧乏克服を終えたから、取組むべきは、なお困窮しているアジア諸国の問題だと考え始めていたからである。この時、私の胸中に若き日のインドネシア独立への感動が潜んでいたかも知れないが、特にそれを意識してではなかった。

市村所長の頃の京大東南アジア研究所。㊦現研究所（稲盛財団記念館）

阪大側の事情から、京大転任は翌 43 年の 11 月、所長就任は翌年 4 月になった。以後 10 年間、所長として新研究所づくりに、非常な苦心をした。

苦心の第 1 は、全共闘派や民青（共産党）系左翼学生の反東南アジア研究運動とそれを支持する左翼教授への対処であった。第 2 は、新研究を行う人材の養成であった。第 3 は、未発展の東南アジアの地域研究を推進するに必要な研究体制と現地の大学研究所との連携網の構築であった。此処では詳論しない。

第 1 の点についてただ一言。学生の主張を支持した様な京大その他の教授は、実に信念も責任感もない連中で、1979 年の鄧小平改革以後、黙して何も語らない。第 2、第 3 の点は、所長として当然の責務だが、同研究所の立派な現状がその成果を証明する。

研究対象は、東南アジアと周辺全体だが、インドネシアは特に力を入れた。なにしろ、65 年軍事クーデターの直後で、どこから手をつけられるか五里霧中であった。猛烈なインフレの最中、空港からは白タクに乗る有様。正式の出張費では満足なホテルにも泊まれず、外貨持出は制限されていた。私は大胆にあらゆる工夫をして、現地に 2 年分の家賃を前払いして借家し、日本払い現地デリバリーでジープを買い、研究体制を整えた。そして国家開発庁長官のウィジョヨ博士とのコネに頼って、社会経済研究所との共同研究として南スマトラ州経済調査を実施した。これが同国の中央統計

局による国民所得の正確な推計の創始となった。また大来佐武郎大臣と同国政府との要請に応じて、同庁内にインドネシア経済予測のための日本人チームを送り込んだ。学者（名大飯田、京産大小林、大阪国際大小田野、松本等）と経済企画庁（馬場、栗林、金子、小菅等）の専門家のチームが十数年滞在して同国経済を分析予測した。その成果は、毎年同庁の年次予測として会議で発表、新聞に公表されて評判を呼んだ。

1988 年京大を退官する際、国際協力事業団の助成により、インドネシア研究の成果を『インドネシアの経済発展』なる英文総合報告にまとめた。同時にウィジョヨ博士の要請により、インドネシア語で *Pembangunan Ekonomi Indonesia,* 1989 としてインドネシア大学出版部から刊行した。同国の多くの大学が教科書に使ったと聞くのは、大きな喜びである。

我々の研究は、政府に協力したものだけではない。他の人類学、社会学、農学等多くの分野でも多様な成果をあげた。それ等は大半英語で発表されている。インドネシア研究に限らず、私も一生の著書約 50 冊の半分は英文で発表した。その半ばは和訳されていない。

インドネシア研究では、もう 1 冊クンチョロニグラート博士と共編『Indonesia: Masalah dan Peristiwa Bunga Rampai』(インドネシア：様々な課題と事象) Obor, Jakarta, 1975 がある。この 2 書以外、インドネシア語で日本人が発表した専門書はないのではないか。私のささやかな自慢である。

4．インドネシアへの期待

専門家としてインドネシアにかかわって 40 年、その間インドネシアも変貌した。若きガジャマダ大学の助教授から国家開発庁の局長にウィジョヨ長官が抜擢したブディヨノ博士が今副大統領である。インドネシア大学を華人の故に追われたパンライキム教授の愛娘さんが今貿易大臣である。1970 年代タブーであった地方分権政策は、今や着々と実施に移されつつある。前途は心配ないか。

私には心配が多い。特に、1 つと問われれば、私は答えたい。「人材養成」と。オランダは、東南アジアを数百年支配した宗主国のなかで最も教育に力を入れなかった国である。その積弊は深刻である。彼等は日本の明治に学ぶべきである。「坂の上の雲」を訳してあげる人はいないか。日本の為すべき事は多い。日本語のできる人材養成の努力を 10 倍にせよ。そして日本から学ばせよ。それは日本人の自信をも高めるであろう。

南十字星会　幹事

2010年4月現在

会長	山口 寛	(58卒)
代表幹事	小原一范	(09卒)
同(会報)	岩谷英夫	(64卒)
同	宮崎尚大	(65卒)
幹事	渡辺重視	(04卒)
幹事	藤木長信	(60卒)
幹事	白丸敏一	(75卒)
幹事	安田和彦	(69卒)
幹事	片山秀樹	(80卒)
幹事	沖中弘利	(95卒)
幹事	芝田亜希	(03卒)
幹事	増田宗行	(07卒)
特別幹事	松野明久	(教員)
関東支部長	渡邊悠二	(69卒)
JKL支部長	内原正司	(04卒)

◇幹事会◇

年に4回程度開催。会の運営・行事などについて協議する。メンバーは左表の通り。仕事の都合で随時異動も。現在、幹事増員を検討中で、会の活性化を目指している。

2010 年度　南十字星会の予定

◇総会

10 月 23 日（土）正午～

新阪急ホテル 2 階

（大阪市北区芝田 1-1-35）

※隔年に開催の定例総会　多数ご参加を

◇サザンクロス懇話会

5 月 15 日（土）午後 1 時半～

大阪大学中之島センター9 階

（大阪市北区中之島 4-3-53）

※テーマは「海外からの看護師・介護士」

※連絡先=宮崎　morio-miyazaki@nifty.com

◇関東支部懇親会

7 月に予定

◇編集委員会

・会報発行（4、10 月）・ホームページの更新

キャンパス便り

大阪大学大学院
国際公共政策研究科　教授　　松野　明久
（外国語学部インドネシア語専攻担当教員）

'09 年度Ⅱ学期の学生たち

秋の学園祭と言えば語劇だが、今年度（2010 年）インドネシア語は語劇を断念することにした。統合の結果、学生数が減った上に、学生の課外活動が豊中キャンパスと箕面キャンパスに分裂していて、放課後一緒に練習するということが難しくなっている。また 1 年生は基本的に豊中ベースだし、3 年生は秋から就職活動が入り、中心となる 2 年生が先輩・後輩に支援を求めるのも難しい。今後どうするか、課題を残した。

スピーチする坂田菜摘さん（撮影・福岡先生）

09 年 11 月 22 日、南山大学外国語学部が主催したインドネシア語スピーチコンテスト（第 2 回）で、本専攻語 1 年の坂田菜摘さんが敢闘賞を受賞した。テーマはインドネシアからの看護師・介護士来日についてで、堂々としたスピーチだった。

11 月 28 日、EPA で来日したインドネシア人看護師・介護福祉士候補者を支援する市民のグループ「ガルーダ・サポーターズ」の関西集会が大阪市内で行なわれ、本専攻語 2 年生 3 人がボランティアで手伝った。この問題に対する学生の関心は高く、3・4 年生が時々授業レポートのテーマにしている。私自身はこの日、インドネシア人候補者たちのミーティングの司会を務めた。ちなみに、集会には甲南女子大学のボランティアグループ（MP2）の学生が多数参加していたが、グループの顧問を務める同大学の湯淺章子准教授も大阪外大大学院（修士課程・インドネシア語）の修了生だ。

4 年生については、卒論を書いた者が 4 名。全員力作を書いて、無事提出した。ただ、就職は今までになく厳しかったようだ。次年度改めて就活を行なうと決めた学生もいる。

元々、私が赴任した 1983 年から今まで、インドネシア語による採用はごくわずかしかなく、近年ますます難しい。私も、学生には、インドネシアを通じて世界の何たるか、人間の何たるかを学ぶことが大事であり、世の中を大きくとらえて欲しいと言っている。

しかし、表面的な勉強では本当のものは得られない。深く入り込んでこそ得られるものもあるのだと。そういう意味で、少なからぬ 3 年生が春以降、インドネシアや英語圏への留学、インターン（NGO、ホテル）など長期の海外生活を計画しているのは頼もしい。

スチャヤ先生来学

11 月 15 日から 2 ヶ月、ウダヤナ大学文学部のイ・グスティ・マデ・スチャヤ教授（Prof. I Gusti Made Sutjaja）が世界言語研究センターに研究滞在された。受け入れは原先生。スチャヤ先生はシドニー大学で博士号を取得された言語学者で、タトル社から出しておられる『Concise Balinese Dictionary』『Everyday BALINESE』は、バリの空港内書店にも置いてある。スチャヤ先生には 1 月 19 日、「インドネシア・バリの伝統と言語」と題して学内サザンクロス講演会でお話しいただいた。

よく共同研究室にラップトップを持ち込んで仕事をされ、学生とも時折交流しておられた。寒い時期ではあったが、ご夫婦で箕面での静かな日々を楽しまれたことと思う。

スチャヤ先生ご夫妻　＝箕面の滝で（撮影・原先生）

サフィトリ先生の送別会

記念品を受けるサフィトリ先生。各学年主体で送別会は複数回行われた　=箕面キャンパスで（撮影・OB の増田氏）

サフィトリ先生は 2004 年 4 月に来られて 6 年間、本学で教鞭をとっていただいた。学生のことを一人一人よく覚えて下さり、細かな指導をしていただいた。時々、共同研究室でソトやガドガドなどインドネシア料理を学生に教えておられたのを思い出す。2 月 10 日、学生食堂の一角を借りて学生たちがサフィトリ先生のお別れパーティーを開いた時には 1 年生や卒業生も駆けつけた。心のこもった記念品にさすがに涙ぐんでおられた様子だ。

滞在中、日本での生活に不満を述べられたことはあまりないが、花粉症にかかられたのは思いも寄らず大変なことだったに違いない。帰国後のご健康とご活躍を祈りたい。

私の研究と活動

個人的には 2009 年度も忙しい年だった。研究会は、東ティモール大学での国際研究集会（ディリ、7 月）、バングラデッシュ・チッタゴン丘陵地帯の民族問題についてのシンポジウム（立教大、9 月）、EPA 看護師・介護士問題についてのシンポジウム（神田外語大、2 月）に参加。調査は 9 月と 1 月にバリ島で 9・30 事件について聞き取り。その他、東京外語会関西支部例会で講演（4 月）、サザンクロス懇話会（6 月）、夏休みには専任となった法学部の学生を連れて東ティモールへのスタディーツアーを行なった。

報道関係では NHK World（英語放送）のテレビ出演が 2 度あり（9 月東ティモール独立 10 周年、2 月 EPA）、朝日新聞東京本社の国際報道記者の勉強会で平和構築について話をした（2 月）。EPA についての取材も何度か受けた。

和歌山県畜産試験場で「つなぎ」を着て見学する学生たち（撮影・筆者）

ちょっと変わった活動としては、和歌山県すさみ町のイノブタ見学を学生 3 人と行なったことだ（2 月）。イノブタ（イノシシと豚をかけ合わせたもの）による地域振興に関心をもつ同町出身の森下さん（3 年）の案内で、県畜産試験場、生産者組合、ホテルを訪ね、関係者から話を聞いた。

直接インドネシアと関係はないが、地域の産業振興は発展途上国共通の課題だ。私の場合、昨年西スマトラ（パダン）地震被災地支援のためヤギ飼育プロジェクトの募金をしたこともあり、畜産の現場に興味があった。

畜産となると目を輝かせて話をされる試験場の研究員の方々、スラスラとそらでデータを出される役場の方、ビジネスに強い意志をもって臨んでおられるホテル社長など、学ぶところの多い旅だった。

実は南紀へ行くのは初めてだったが、ダイナミックに太平洋を眺望するホテルの露天風呂がとくに気に入った。

（イノブタに関心のある方、料亭・レストランをご存知でしたらご連絡ください）

ジャカルタ発

地震との因縁

飯沼　智　('93 卒)

大阪外大を卒業後、ＮＨＫで記者をしております。ジャカルタ支局赴任を命じられた私は、2009 年 9 月 2 日の夜にスカルノ・ハッタ空港に降り立ちました。これから運命を共にすることになる職場の同僚のカメラマンから早速電話が入りました。「着きましたか。お疲れ様です。それでですね、日中にでかい地震があったんですよ。今、現場に向かってます」。

ジャカルタ支局から、中継を準備しているところ

地震の多いインドネシア。なかなか気の利いたジョークだと思い、話を合わせました。「またスマトラ沖ですか？」。しかし、同僚は真剣に話を続けます。「いや、今回はジャワ島です。ジャカルタもけっこう揺れました。震源はジャワ島の南の沖合で、震源に近い所では被害も出ているみたいです。とりあえずそこへ向かっています」。地震は私が飛行機に乗っている間に起きたものでした。マグニチュードは 7.0。ジャワ島の西部で死者・行方不明者が 100 人を超える大きな災害となりました。

インドネシアの地震といえば、2004 年末にインド洋大津波を発生させたスマトラ島沖の巨大地震が皆様のご記憶にも新しいことと思います。翌年の 3 月下旬、再び近くの震源でマグニチュード 8.7 という地震が発生しました。津波被害の取材で当時アチェにいた私は、日本では経験したことのない振幅の大きい、長時間続く揺れを体験しました。インドネシアは本当に地震が多い。しかも規模が大きい。このとき強く感じました。

インドネシア駐在が決まったときには、地震取材への備えはしっかりと整えておかなければならないと覚悟していたつもりでした。でも、まさか着任当日というタイミングで起こるとは、予想すらしていませんでした。

アチェの海岸付近でリポートをする筆者

ジャカルタでの生活が始まってまだ 1 か月もしないうちに、再び大きな地震が発生しました。今度はスマトラ島中部のパダン沖が震源です。翌日現地入りすると、鉄筋コンクリートでつくられた大型の建物の多くが倒壊している様子に圧倒されました。あちらこちらで「瓦礫の下に閉じ込められている人がいる」と地元の人たちが訴えていますが、助けは来ません。電気が通じないため信号は止まり、道路はどこも渋滞だらけ。電話も非常に通じにくい状態になっていて、街は完全に麻痺していました。

パダン沖の地震で、倒壊した市内の建物。
㊦は老舗ホテル。数十人が犠牲になった

取材 1 日目は映像も原稿も衛星電話を使って東京に送るしか手段がありませんでした。パダン市内では主だったホテルが全て倒壊し、やっと見つけた小さな宿も建物に大きなひびが入っていて、恐ろしくて中で眠る気にはなれません。宿の前の空き地にテントを張って僅かの時間の睡眠を取ることとしました。この地震も死者は 1000 人を超える大惨事となり、1 週間にわたって現地で取材を続けました。

専門家によれば、今、地球全体が地震の活動期に入っているとのこと。また多くの学者が今後もインドネシアでは大地震が続くと予想しています。地震との因縁が深く、トラウマになりそうですが、今後も備えは怠りなくしていきたいと思います。

寄稿　*Apa & siapa*

再発見の旅

松本　雅子（'80 卒）

「今度、ボロブドゥールを見に行こう」「えっ、私、もう見たよ」。夫の仕事の関係でシンガポールに住んでいる間に、地の利を生かして夫婦で東南アジア旅行をしようと話していた。夫が最初に提案したのはボロブドゥール遺跡だった。しかし、私は 30 年前に開港したばかりの成田空港からその地へ飛んでいたのだ。

自分が勉強している国を見ておきたい。日本では聞くことが難しかった生のインドネシア語を聞きたいー。成人式の着物の代わりに、インドネシアへ行かせて欲しいと母に言って、やっと実現したインドネシア訪問。あの時の苦労は何だったのかと思いながらも、夫との 1 泊 2 日のジョグジャカルタ旅行が決まった。

ジョグジャカルタの空港から市の中心部へ向かう道路は、かつては未舗装で自動車も少なく、牛が荷車を引いていたりして実に長閑だった。今は、自動車も増えて、バイクが道路に溢れていた。バイク 1 台に 1 家 3〜4 人が乗っている。車線、車間距離も気にせず、とにかく飛ばす。怖いやら感心するやら。昔のジャカルタのようだ。父親がバイクのハンドルを握り、母親が子供をおんぶし、父親の前に子供が 1 人、父親と母親の間に子供がもう 1 人乗っていて、驚いたものだ。その光景が、あの静かで長閑だったジョグジャカルタにそっくり移植されていた。

翌朝、遺跡に向かった。まずはボロブドゥールへ。以前は窓を開け放った小型のバスで行った。座席のクッションは無いに等しく、ガタガタ道。すぐにお尻は痛くなる。頬の肉は揺れるものだと分かった。当時は遺跡近くのちょっとした広場らしき場所でバスから降りて、道端にずらっと土産物の店が並んでいる緩やかな上り坂を暫く歩いたような気がする。今回はきちんとした駐車場で、クーラーの効いた自動車から降りた。土産物店も行儀良く並んでいたが、売っているものは以前とそれほど変わらなかった。

遺跡の周囲は広く開かれ、芝生や石畳で綺麗な公園

ボロブドゥール遺跡で撮った記念写真

になっていた。木々も昔からのジャングルの椰子の木ではなく、新たに植えられたいろんな木々が大きく育っていた。以前は遺跡までの道を汗だくで歩いて、やがて目の前に広がったボロブドゥールに驚かされた。約 1,200 年も前に建造された壮大な石造物が、その後何百年も土に埋もれ、偶然発見されて再びその雄大な姿を現す。その不思議、そして不思議なのに何故か納得してしまう雰囲気を、今も思い出す。周囲がすっかり綺麗で便利に整備され、遺跡が大切に保存されているのを嬉しく思った。初めの感動は実に強烈だった。時が経ち、2 度目の訪問。また、違った感慨を覚える。

急な石段を昔と同じように昇り、回廊を廻って行く。壁画のレリーフは以前の記憶以上に素晴らしかった。緻密で登場人物の表情も生き生きしていて、想像を掻き立てた。全部壁画をゆっくり見たかったが、時間の制約で出来なかった。触れると幸せになるというストゥーパの石組みのなかの仏様。前にも触っておきながら、また必死で手を伸ばした。円壇の眼下には、確か椰子の葉の海広がっていたのが、今は向こうの山には現代的なホテルが建っていた。

その後、プランバナン（写真㊧）に向かった。ヒンドゥー寺院はシンガポールにも多く、少し知ったようなつもりでいた。しかし、プランバナンはやはり全く別格だった。ヒンドゥーの神々、動物、装飾、象徴がびっしりと彫り込まれた大きな石が、何千何万（？）と積み上げられた塔、寺院が幾つもそそり立っていた。地震でずいぶん崩れてしまって痛ましく、懸命に修復工事が行われている。元の姿に戻るまで、まだ相当な時間、労力、費用がかかるだろう。復旧の努力が実り、遺跡が可能な限り昔の姿を留めることを祈った。

隣接した地域に、異なった宗教の建造物が共存し、異なった宗教の人々の手で大切に守られている。理由は種々あるだろうが、きっと底流にインドネシア人独特の包容力があるに違いない。忘れていた感動に 30 年ぶりに再び出会えた旅だった。

寄稿　*Apa & siapa*

インドネシア語科へ 入ったきっかけ

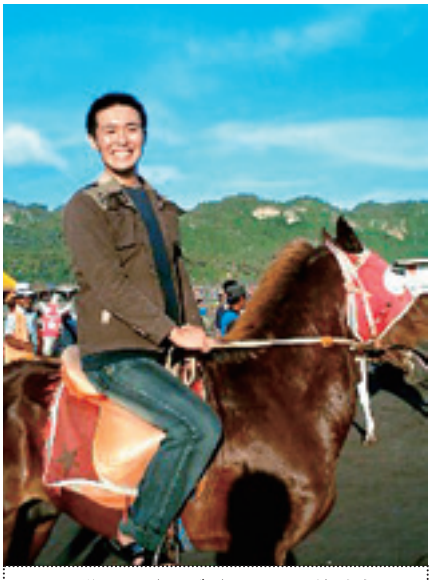
今井　健太　('08 卒)

私が大阪外国語大学インドネシア語科に入学したのは、2002 年 4 月でした。志望するに至った理由は、ずばり、祖父母の影響なのです。古い伝聞話で、記憶もあいまいです。若干の誤りは、ご了承ください。

私の祖父は 1970 年頃、ちょうど日本の繊維業界がインドネシアに参入していった時期に、ジェトロのバンドン事務所開設のためインドネシアに足を踏み入れました。「八染会」という会の代表で行ったそうです。

祖父は、バンドン到着後、事務所開設に始まり、染色の専門家として、現地華僑の繊維企業での染料開発や現地の技術者教育につとめたと聞いています。開発した染料や媒染液を、ボゴールに現在もあるユニテックス（ユニチカの繊維事業の現地法人）などに納めていたそうです。もちろん祖母もついて行き、祖父を支えました。

こうした祖父母のインドネシアでの生活を幼少の頃から聞かされていた私は、インドネシアに非常に興味を持つようになり、外大インドネシア語科を目指す形となりました。



留学中、ジョグジャで乗馬体験も

私自身の話に戻ります。私は 2005 年 8 月から 1 年間ジョグジャカルタのガジャマダ大学に留学しました。その間、06 年 5 月にジョグジャカルタで地震が発生、約 5,000 人の方達が亡くなられました。私自身も下宿先の屋根が落下し、危うく下敷きにという恐怖も味わいました。しかし、全体的には非常に楽しく、エネルギッシュな留学生活を送ることができました。

私は現在、防衛省に勤めております。社会人になってからは学生時代ほどインドネシアと関わることはなくなりましたが、昨年 5 月のゴールデンウィークに祖母と 4 泊 5 日のインドネシア旅行に行ってきました。残念ながら、祖父は私が大学に入学した 02 年にすでに他界しており、今回の旅行は、祖父の遺骨を祖父母 2 人の思い出の地であるバンドンのレンバンにある硫黄の山タンクバン・プラフに散骨し、バンドン滞在時に住んでいた家を探しに行くというものでした。散骨は無事にできましたし、昔の家探しもホテルのボーイさんやチャーターした車の運転手と話しながら、恐らくここであろうという家に辿り着きました。現在の家主に直接聞いても良かったのですが、祖母が「そこまでせんでええ」と言うので、そのまま帰りました。日本帰国後、祖父母と共に 2 年間バンドンに滞在した母が写真を見て「ここやわ。懐かしいわ」と言ったので、恐らく間違いないでしょう。当時と違い、道幅も広くなり、周りの家の数や大きさも違ってきているでしょうから、間違いなくここだと断定するのは難しそうです。それでも、祖父母が昔住んでいた場所を訪れ、また祖母に見せてもらった当時の写真を見て、改めて長い時間が経過したのだと感じました。それと共に当時、インドネシアへ勇躍駐在され、今と違い衛生環境も悪く（今も良いとは言えませんが）、何もない所からビジネスを立ち上げていった方達に尊敬を覚えます。全てを会社に用意してもらっている現代の若手駐在員は恵まれすぎて、逆に良くないのかもしれません。

㊧祖母。背後はタンクバン・プラフ㊨はジョグジャ地震時の医療救援活動で友人らと

若干脱線しましたが、今年のゴールデンウィークも「祖母のバンドン回想ツアー第 2 弾」を計画しています。祖母がまた行きたいと言い出したので、できるだけ安い航空券を探して…。今度はプンチャックなど、ジャカルターバンドン辺りで、前回行った所以外の祖母の思い出の地を目一杯回ってくるつもりです。

最後になりますが、南十字星会 OB・OG の皆々様も健康に気をつけられ、お元気でお過ごしください。また、同窓会でお会いしたいと思っております。

寄稿　*Apa & siapa*

定年後に 3 度の訪問

床次　泰文（'70 卒）

拓植大学の学生と一緒に

2007 年 8 月末、私は約 37 年半勤めた会社（電機メーカー）を定年退職した。重電海外関係の営業と海外建設プロジェクトのフォロー、後半は重電国内海外プロジェクトの資材調達業務に従事した。直接“インドネシア”に関わったのは、入社 6 年目にジャカルタに 4 か月ほど出張したのと、1980 年代にアサハン水力発電アルミ精錬プロジェクト（スマトラ）やグレシック火力発電プロジェクト（東部ジャワ）に携わった通算 5、6 年程度。最後の出張は 1985 年で、それ以降は訪れる機会がなかった。それでも個人的には 1970 年の入社以来、インドネシアの出版物を購読したり、映画会などに参加するなど、インドネシアとの接点は維持してきた。

退職前に松野明久先生を代表とする JANNI（日本インドネシア NGO ネットワーク）の会員となっていた。そして、ボゴール近くの農村で 9 月 1 日から学生たちとホームステイするので、いかがとのお誘いを受けた。その日は“退職の翌日”であった。

標高約 600 ㍍に位置する農村はキャッサバ畑が散在する。それぞれホストファミリーに分宿、約 1 週間の滞在が始まった。水は井戸水。水浴び（湯無し）、トイレは地下浸透型、燃料は当時の LPG 切替政策の灯油不足からか薪だった。若い後輩たちも戸惑ったようだが、私ともどもすぐ慣れた。全員で行動したのは、村でのお祭り、泊まり掛けのハイキング、地元のお母さん方とのピクニックなどだったが、朝夕はホストファミリーでお世話に（**写真中央、子供らと**）。後輩たちはその年の 4 月に入学したばかり。夏休み中に「インドネシア語の単語を 300 覚えなさい」と宿題を与えられた由。最終日の朝、涙を流しながら別れを惜しむ。立派に心が通える交流ができたのだと、ほほえましく頼もしく思った。私自身にとって約 21 年ぶりのインドネシア。学生時代からの先入観や以前来た時の印象をほとんど払拭し“現実・現在のインドネシア”にリセット出来た絶好の機会となった。

退職後 2 度目のインドネシア訪問は家族 3 人連れ。旅行会社のパックツアーで 4 泊 5 日のバリ・ジョグジャカルタに。夜半デンパサール空港に到着。日本語ガイドの叔父さんに会い、終始お世話になった。私はこの地へは 1976 年以来の 2 度目。記憶が残っていないのか、すっかり様子が変わってしまったのか、全く昔の面影は見いだされなかった。娘や妻は、風景よりも土産物探しを楽しんでいた。

ジョグジャではボロブドゥール（仏教）とプランバナン（ヒンドゥー教）の遺跡を十分堪能することができた。なにせまだ上八の学生時代から“行きたい、見たい”と憧れていたところだったから。妻や娘もこれらの石造建築物に圧倒されたようだ。

ホテルからマリオボーロ通りに向かう小道に“TUKANG GIGI“の看板とゲラゲラ笑う入れ歯のイラストが出ていた。歯医者＝Tukang Gigi と覚えていたが、なんのことはない。日本でいえば歯科技工士を意味する言葉だったのである。

退職後 3 度目のインドネシア訪問は拓殖大学政経学部井上ゼミの学生たちと東カリマンタンとバリ島へ。井上治先生は JANNI の運営委員をしておられ、新進気鋭のインドネシア政治の研究者である。ゼミの希望者を募り、カリマンタンでのオラン・ウータンの保護観察状況とバリ島でのゴミ処理状況を視察。そのエコ・ツアーにくっついていった。

定年退職して 2 年もしない内にインドネシアに 3 度も行けた私は幸せ者であろう。定年後は心身ともにフリーだ。体力と気力、好奇心、それにどこからか捻り出せる資金があればいつでも OK。心も弾んでくる。

学生時代からインドネシアを学んできた者は、事情に詳しいという自負と責任感があるのではないか。しかし、振り返ると、学校で学んだことはごく初歩的だ。第 1、常に相手は変化している。社会には様々な分野でインドネシア専門家が輩出している。実際に身をもって知ったのは大きな収穫であった。学生当時「インドネシアは文学でも政治でも研究未開拓の分野が多い」と聞かされたが、今や隔世の感がある。

寄稿　*Apa & siapa*

留学の思い出

高田　芳博（'07 卒）

英語の先生になろうと入った外大。たまたま目にとまったインドネシア語。勉強に励むでもなく、部活をするでもなく、週 5 日バイトをする日々。平凡な大学生だったのですが、ただ 4 年も勉強するのだから 1 度留学してみようか。同級生がインドネシア大学とガジャマダ大学に行くので、自分はバンドゥンにしよう。安易にこう考えたのがきっかけで 2005 年にバンドゥンのパジャジャラン大学（UNPAD, Universitas Padjadjaran）に留学しました。

日本留学中の友達がバンドゥン出身だったので、無茶を言って実家に泊めてもらい、そのままコス探しも手伝ってもらいました。他にも親戚の結婚式やお葬式に連れて行ってもらったり、あれは食べたか、ここは行ったかと本当に色々な所に連れて行ってくれました。今まで遠慮しがちだった私にとって、みんなの優しさは衝撃的でした。

バイクで走った、今にも切れそうな吊り橋　＝パガンダランで

UNPAD では、一般のキャンパスとは違う建物で外国人向けの授業が行われていました。1 日 3 時間の授業があるだけで、文学部のクラスに顔を出すようなこともなく、他の学部のインドネシア人学生との交流はほとんどありませんでした。その分、昼からはモールへ遊びに行ったり、コスに戻って友達と話したりと、のんびりとした留学生活を送っていました。

アンコ（乗合バス）に乗っては割増料金を請求する運転手ともめたり、食中毒になってミミズを煎じたものを飲まされたり、日本では到底話しかけない人と友達になれたり、なぜか日本の小説にはまったり。そして、誕生日にお祝いで水をかけられごはんをおごらされたり、“Jangan ganggu” がうまく言えずバカにされケンカしたり。どれも良い思い出です。

留学中に学友らと旅行も。前列の左端が筆者

留学したのはたった 4 カ月間で、本当にあっと言う間でした。もっと長く留学していたらとか、色々チャレンジしていれば、と今でもタラレバは尽きません。でも、短い期間でしたが、留学時の経験や反省、色々な人との出会いがあったおかげで、今の自分があるのだと思います。さまざまな体験は、きっとこれから先にも影響を与えていくことでしょう。小さなきっかけから始まった私とインドネシアの関係ですが、その偶然に本当に感謝しています。

現在、私は社会人 3 年目です。大阪のメーカーに勤めていて、インドネシアと全く関わりのない仕事です。年末年始はバリに旅行に行きました。近くのロンボク島 gili air の日の出の風景は脳裏に焼き付いています。ただ、それ以外はなんだかんだで、結局インドネシアとは無縁の日常です。

学んだ言葉、向こうでの日々、出会った人々、せっかく得たものなのに、それと関わらない生活というのは何だかさびしいものです。仕事とすると難しいですが、せめて少しでもインドネシアに関わった人生にしたいと思います。

ロンボク島ギリ・アイルの日の出

というわけで、次回の南十字星会の集まりにはぜひ参加させて頂きたいと思います。諸先輩方から素敵なお話を伺い楽しい時間にしたいなと考えておりますので、皆様宜しくお願いいたします。

寄稿　*Apa & siapa*

堀内氏の逝去を悼む

藤野　龍雄　('64卒)

旅行したサラワク・ミリで堀内氏夫妻(右)と＝08年10月

まず自己紹介です。私は1964年に卒業し、当時上り調子だった、とある木材輸入専門商社に入社しました。初めての現地赴任はスカルノ革命の余韻覚めやらぬ1966年。上役の出張に“通訳”として付いて行ったつもりでした。結果は通訳どころか、Bahasa も英語も全く使いものになりません。

クビにこそなりませんでしたが、そのまま置き去りにされてほぼ1年。環境は悪く、安い日当扱いです。殆ど仕事が無かったのを幸いに、ボーイさんを手始めに、次々と話し相手を変えました。会話特訓は効を奏したようです。小さな自信が、その後の海外生活を支えてくれる大きな力になりました。まさに「塞翁が馬」。恥ずかしさを捨て、一生懸命になれば相手が胸を開いてくれます。それをこの時学びました。2年目には駐在員の肩書きと待遇をもらい、その後出たり入ったりしながら1980年まで、延べ14年は“インドネシア漬け”でした。でも、インドネシアとの関係は残念ながらそこで終わりました。

04年、ガイアナのカーニバルで

フィリピンから始まった森林開発は1965－1980年頃にかけて瞬く間にマレーシア、インドネシアの奥地へと広がり、木材は最大の外貨の稼ぎ頭に成長しました。その後、資源保護の動きから、丸太の輸出規制と工業化が始まり、これに上手く対応出来なかった会社が1984年無くなってしまったからです。

先輩の堀内由久氏は1958年卒で、6年先輩の社員として会社に居られました。勤務地がすれ違いばかりで、一緒に仕事をしたのは1年半ほど。関係が深まったのは人生の第2ステージ、会社が無くなってからです。

職場の消失は、サラリーマンにとって大事件でしたが、幸いなことに会社と親密な関係にあった、さる華僑がマレーシアのサラワク州で成功して大実業家になっていました。彼の助けを得て、堀内氏は大阪に以前と同じような輸入業務の会社を設立。私は堀内氏の口利きでその華僑の本社に入れてもらって失業を免れました。香港、サラワク、パプア・ニューギニア、さらに南米のガイアナまで転々と。同社のプロジェクトを監督する日本人マネージャーとして定年を過ぎてまで何とか頑張ることが出来ました。華僑の組織は日本と違い、ある階級以上のスタッフの行動をさほどがんじがらめに縛りませんから、2人の関係は日本の会社の上司と部下より“より対等”に近い立場になれたと思います。中と外で色んなことを一緒にやりました。

そしてあっと言う間に20年がたち、私は2004年、体力的な余力を残して64歳でガイアナを最後に帰国。堀内氏も2006年72歳で大阪の会社を退職して引退されました。お互い損得の世界から身を引いて、人生の第3ステージをのんびり暮らしましょうと話していた矢先でした。1昨年12月、癌が見つかり、小康状態の時期もありましたが、昨年9月頃から急激に病状が悪化。10月8日に終に帰らぬ人となられました。

独酌で、飲めぬ私を前に「君を海外ばかりにしてしまって済まないね」と滋賀県出身のくせに東京弁なまりで言う先輩。「いや、置き去りは慣れてますよ。あっちの方が性に合うてますねん」と京都弁で返事しながら、好物のホッケをつついていた私。そんな食事の光景が、昨日のことのように思い出されます。お亡くなりになる丁度1年前、奥様もご一緒にサラワクへ出かけたのが最後の思い出になってしまいました。

享年75歳。少し早すぎる旅立ちで、ご本人が1番残念だったでしょう。『永い海外生活で失ったものも沢山ありましたが、後悔はありません。結構面白い現役生活でしたよ』とお別れに際し申し添えます。どうか、安らかにお休みください。　合掌。

◆訃報◆　おくやみ申し上げます

鹿田牧男（44卒）
＝横浜市　09年8月23日死去

野尻庄蔵（53卒）
＝大阪市　09年8月12日死去

東原嘉孝（57卒）
＝船橋市　10年1月17日死去

青沼勝治（58卒）
＝浜松市　09年10月27日死去

島田利夫（58卒）
＝豊中市　09年11月19日死去

堀内由久（58卒）
＝大津市　09年10月8日死去